

次の英文の下線部(1) - (3)を日本語に訳しなさい。

It is a common saying that thought is free. A man can never be hindered from thinking whatever he chooses so long as he conceals what he thinks. The working of his mind is limited only by the bounds of his experience and the power of his imagination. But this natural liberty of private thinking is of little value. It is unsatisfactory and even painful to the thinker himself, if he is not permitted to communicate his thoughts to others, and it is obviously of no value to his neighbours. Moreover it is extremely difficult to hide thoughts that have any power over the mind. (1) If a man's thinking leads him to call in question ideas and customs which regulate the behaviour of those about him, to reject beliefs which they hold, to see better ways of life than those they follow, it is almost impossible for him, if he is convinced of the truth of his own reasoning, not to betray by silence, chance words, or general attitude that he is different from them and does not share their opinions. Some have preferred, like Socrates, some would prefer today, to face death rather than conceal their thoughts. This freedom of thought, in any valuable sense, includes freedom of speech.

At present, in the most civilized countries, freedom of speech is taken as a matter of course and seems a perfectly simple thing. We are so accustomed to it that we look on it as a natural right. But this right has been acquired only in quite recent times, and the way to its attainment has lain through lakes of blood. It has taken centuries to persuade the most enlightened peoples that liberty to publish one's opinions and to discuss all questions is a good and not a bad thing. Human societies (there are some brilliant exceptions) have been generally opposed to freedom of thought, or, in other words, to new ideas, and it is easy to see why.

The average brain is naturally lazy and tends to take the line of least resistance. The mental world of the ordinary man consists of beliefs which he has accepted without questioning and to which he is firmly attached; he is instinctively hostile to anything which would upset the established order of this familiar world. A new idea, inconsistent with some of the beliefs which he holds, means the necessity of rearranging his mind; and this process is laborious, requiring a painful expense of brain-energy. To him and his fellows, who form the vast majority, new ideas, and opinions which cast doubt on established beliefs and institutions, seem evil because they are disagreeable.

(2) The disgust due to mere mental laziness is increased by a positive feeling

of fear. The conservative instinct hardens into the conservative doctrine that the foundations of society are endangered by any alterations in the structure. It is only recently that men have been abandoning the belief that the welfare of a society depends on rigid stability and on the preservation of its traditions and institutions unchanged. Wherever that belief prevails, novel opinions are felt to be dangerous as well as annoying, and any one who asks inconvenient questions about the reason for and the purpose of accepted principles is considered an evil person.

We still meet people who consider a new idea an annoyance and probably a danger. Of those to whom it is disgusting, how many are there who have never examined the arguments for and against it, but turn away in disgust simply because the notion disturbs their mental universe and implies a drastic criticism on the order of things to which they are accustomed? And how many are there who would refuse to consider any proposals for altering our imperfect social institutions, because such an idea offends a mass of prejudice associated with religious traditions? (3) But if they are not right, it may not be their fault. They are actuated by the motives which are a bar to progress. The existence of people of this mentality, living in an atmosphere of freedom, side by side with others who are always looking out for new ideas, enables us to realize how, when public opinion is formed by the views of such men, thought is hindered and knowledge is restricted enormously.

[全訳] 思考は自由である、とはよく言われることである。人は、考えていることを隠しているかぎりには、自分が望むどのようなことを考えようと妨げられることはけっしてない。人間の心の働きを制約するのは、その人の経験の範囲と想像力だけである。しかし、この持って生まれた個人の思考の自由にはほとんど価値はない。もし自分の考えを他人に伝えることが許されないならば、そうした思考の自由は思考する本人にとっては満足できないばかりか苦痛でさえあり、しかも周りにいる人々にとっては明らかに何の価値もない。おまけに、少しでも心を支配している考えを隠すのはきわめて難しい。(1) もし人が思考の結果として、自分の周囲の人々の行動を規定している観念や慣習に疑問を抱き、その人たちが信じていることを受け入れず、その人たちが従っている生活様式よりも優れた生活様式を見出すとすれば、自身の推論の正しさを確信している場合には、自分が彼らとは異なりそして考え方が違うという事実を沈黙やふとした言葉や全体的な態度によって表さずにおくことは、ほとんど不可能である。ソクラテスのように、自分の思想を隠すよりはむしろ死に直面することを選んだ人たちもかつていたし、今なおいるだろう。少しでも重要な意味でのこうした思想の自由には、言論の自由が含まれている。

現在、最も文明化した国々では、言論の自由は当然のことと考えられていて、まったく自明なことのようと思われる。我々は言論の自由というものにすっかり慣れてし

まっているので、言論の自由を持って生まれた権利だと考えている。しかしこの権利はごく近年に至ってようやく獲得されたものであり、幾多の流血の惨を経て達成されたものなのである。自分の意見を公表し、あらゆる問題について論じる自由は良いことであって悪いことではないということを、最も啓発された国々の国民に納得させるのにさえ数世紀を要したのである。人間の社会は（優れた例外もいくつかあるもの）概して思想の自由に、つまり、言い換えるならば新しい観念に反対してきたのだが、それが何故であるかは容易にわかる。

普通の人間の頭脳はもともと怠惰であり、最も抵抗の少ない方向に働く[進む]傾向がある。普通の人間の精神の世界は、自分が疑問を持たずに受け入れ、そして強く執着している諸々の考えで成り立っている。こうした馴れ親しんだ世界の既成の秩序を覆すいかなるものに対しても、本能的に敵意を抱くのである。新しい観念は、普通の人間が信じていることのなかにその観念と一致しないものがあるので、精神の再編成を必要とすることになる。そしてこの再編成の過程は時間と労力を要するものであり、苦痛を伴う頭脳のエネルギーの消費が必要となる。大多数に当たるこうした普通の人間とその同類者にとって、新しい観念と、そして既成の考えと制度に疑問を投げかける意見は、不愉快であるために有害に思われるのである。

(2) 単なる精神の怠惰からくる嫌悪が、恐怖という明確な感情によって増幅される。保守的な本能が硬化して、機構を少しでも変えれば社会の基礎が危うくなるという保守的な信条に変わる。最近になってようやく人々は、国家の安寧は強固な安定と、不変の伝統と制度の維持にかかっているという考えを捨てつつある。そうした考えが支配しているところ[社会]ではどこでも、新しい意見は迷惑であると同時に危険でもあると感じられる。そして、一般に認められている原則に対して何故そして何のためにという不都合な疑問を提起する者は誰でも、有害な人物と見なされるのである。

新しい観念は迷惑なものであり、そしておそらく危険なものでもあると考える人々に今でも出会う。新しい観念に嫌悪感を抱く人々のなかには、そうした観念に賛成あるいは反対の論拠を検討したことなどまったくなく、ただそれが自分の精神の世界を混乱させ、自分が馴染んでいる物事の秩序に対する強烈な批判になるというだけで、毛嫌いして背を向けている者がどれほど多いことだろう。また不完全な社会制度を変更しようという提案に対して、そうした考えは宗教的な伝統と結びついた多くの先入観に異を唱えることになるので検討を拒否する、そういう人々がどれほど多いことだろう。(3) しかしもし彼らが正しくないとしても、それは彼らの責任ではないかもしれない。そうした人々の行動を動機づけているのは、進歩を妨げる動機なのである。絶えず新しい観念[思想]を求めている人々と一緒に、自由な雰囲気の中で生活しているにもかかわらず、こうした考え方をする人々が存在することで、世論がそうした人々の意見で成り立っている時に、思想が著しく妨げられ、知識が著しく制限される事情がわかるのである。

* 下線部(1) Ifで始まる6行を越える第一センテンスの主節が it is almost impossible ... 以下であると分かることが大前提だが、これくらいの英文に取り

組む意欲のある人(最難関大学受験生)にとっては難しいことではないはずだ。

そのIf節が leads him to call ..., to reject ..., to see ..., という lead 人 to不定詞 という成り立ちであることも掴めるだろう。

ただし、一つ目の call in[into] question ideas and customs which regulate the behaviour of those about him ← call ideas and customs which regulate the behaviour of those about him in[into] question つまり call~into question というごく普通の表現の語順の入れ替えが把握できないと、その時点で躓くかもしれない。

さらに厄介なのは、主節の中に it is almost impossible for him (,if he is convinced of the truth of his own reasoning,) not to betray (by silence, chance words, or general attitude) that he is ... と二重の挿入部分があることである。not to betray, by silence, chance words, or general attitude, that he is ... とカンマを打ってくれば、betray that ... はもっと容易に掴めるかもしれない。

*下線部(2)は訳文を読めば理解できるはずである。

*下線部(3)は The existence ... enables us to realize how (,when public opinion is formed by the views of such men,) thought is hindered and knowledge is restricted enormously. という文の成り立ちが掴めるかどうかである。when を how と同様に疑問詞と取ると、その先は理解不能になる。

なお living in an atmosphere of freedom ... は分詞構文だが、意味上の主語は文の主語である The existence とは一致しないので、厳密に言えば誤りだが、こうした用法はときおり見られる。しかし、構文的には別の解釈が成り立つ。

*The existence of people of this mentality, living in an atmosphere ... の living 以下は、people of this mentality を非限定的に修飾する現在分詞の形容詞用法であり、The existence of people of this mentality, who live in an atmosphere ... に書き換えることができる。非限定用法の関係詞は通常、接続詞 and か but の働きを兼ねるが、それは関係詞節が文末に位置する場合であり、文中に位置するときは because や though の働きをする。つまり接続詞を用いれば The existence of people of this mentality, though they live in an atmosphere ... と言い換えることができるのだ。(この項補足)

※パッセージ全体の内容は日本語で読めば普通に理解できると思うが、深く読めば、単なる、保守主義の否定ではなく、既存の世界の秩序の根本的な変革を求めるものとも読めるはずだ。しかし歴史的な大転換期にありながら、何をどう変革するか、新たな世界の枠組みはどうあるべきかという構想自体がまったく存在しないのが現実である。

A recently published book by an eminent sociologist describes a number of studies which have indeed shown that once a person's income is above the poverty level, an increasingly larger one contributes next to nothing to happiness.

※前回とは一転してごく短めの一文を取り上げたのには訳がある。以前から英文和訳という大学入試の出題形式を批判してきた某私立大学の先生が、自著の中で自説を敷衍するために例示した英文だからである。ある国立大学の英文和訳問題の最初のセンテンスという以上の指摘はない。

筆者の言葉を借りると、「この37語からなるセンテンスを腕時計で時間を計りながら黙読してみたところ、7秒かかった。この7秒で筆者はこのセンテンスの（明示的意味は）完全に理解した。続けてこのセンテンスを筆者が実際に紙に鉛筆で訳して書き付けてみたところ、3分10秒つまり190秒かかった（中略）」

[最初の筆者の訳]

著名な社会学者によって最近出版された本は、数多くの研究を記述しているが、それらは実際、人の収入がいったん貧困レベルを越えると、それ以上収入が増えても、幸せな感じはほとんど変わらない。

[補足後の筆者の訳]

著名な社会学者によって最近出版された本は、数多くの研究を記述しているが、それらは実際、人の収入がいったん貧困レベルを越えると、それ以上収入が増えても、幸せな感じはほとんど変わらないことを示している。

※つまり下線部が抜けてしまったわけである。筆者によると「(前略)この欠落は筆者の英文理解の程度とは関係ない部分で起こった。文の要素の位置が全く異なる英語を日本語に訳すという作業は、ことほどさように英文理解とは直接関係のない認知作業が必要になるのである。(後略)」

このあと旺文社の全国大学入試問題正解の解答を掲載している。

[旺文社の訳]

ある著名な社会学者が最近出版した本の中で、いったん個人の収入が貧困線を越えてしまうと、さらにますます収入が増大しても、それほど幸福には寄与しない、ということを実際に示す数多くの研究が述べられている。

※筆者の訳のほうがいくつかの点で優れていることを指摘してから、要するに英文和訳という形式は、英語の理解とは直接関係のない作業に無駄な時間を費やしており、「将来テクノロジーが進歩し、日本語に直さなくとも、英文の意味理解の成否が脳を直接観察することで判明するようになれば不要になる」と述べている。

翻訳家になるための試験でもない入試英語で、日本語に直すという作業に多くの時間を費やすことには、私自身、基本的に賛成出来ない。ただし引用した筆者の考え

は幻想に近い。これが出来れば自動翻訳など簡単に実現出来るだろう。少なくとも現在および近い将来には期待出来ない。したがって、マイナス面が多いとはいえ、受験生が与えられた英文の内容を正しく読み取れていることを確認する方法としては、多用しない限りは許容されるのではないだろうか。ただし、一昔前のように訳文の日本語の評価に高い比重を置くのは好ましくないと考えているが、大学が正解例や採点基準を公表しない以上、それなりの配慮は必要になる。

※さらには、英文和訳を批判するならば、逆の和文英訳についてどう考えるかを述べる必要があるだろう。日本語の介在しない自由英作文が理想的かという点、英語を書く力の試験としては、本格的な（長文の）和文英訳のほうが、特に単語力の点ではるかに高い英語力を要求される。結論としては、英文を英語で要約する形式が最も穏当なように思われるが、それぞれ一長一短があるのはやむを得ないだろう。

肝心の英文和訳の解答例だが、だいぶ横道に逸れたので、もう一度英文を掲載してから私の訳例を提示する。

A recently published book by an eminent sociologist describes a number of studies which have indeed shown that once a person's income is above the poverty level, an increasingly larger one contributes next to nothing to happiness.

[阿佐谷英語塾の訳例]

ある著名な社会学者によって最近出版された本の中に、多くの研究が記述されているが、そうした研究によって実際に分かってきたのは、いったん人の収入が貧困のラインを上回ると、収入がさらにいっそう増大しても、幸せの度合いはほとんど変わらないということである。

*next to: almost

※ポイントは節単位の訳し下げと、能動と受動を適宜、切り換えることであるが、私自身としては普通に浮かんでくる訳文である。しかし受験生の解答にここまで求められることはまずないだろう。英語と日本語の力のある最難関大学受験生の参考になれば幸いである。

If we accept that we cannot prevent science and technology from changing our world, we can at least try to ensure that the changes they make are in the right directions. In a democratic society, this means that the public needs to have a basic understanding of science so that it can make informed decisions and not leave them in the hands of experts. At the moment, the public has a rather ambivalent attitude toward science. It has come to expect the steady increase in the standard of living that new developments in science and technology have brought to continue, but it also distrusts science because it doesn't understand it.

[全訳] 科学技術が私たちの世界を変えるのを止められないことを認めるとしても、私たちは少なくとも、科学技術によって生じる変化が確実に正しい方向に向かうように努めることはできる。民主主義社会においては、このことが意味するのは、一般の人々は科学を基本的に理解している必要があり、そうすれば、一般の人々は知識を前提とする決定ができ、そうした決定を専門家の手に委(ゆだ)ねてしまわなくても済むということである。現在、一般の人々は科学に対してかなり矛盾した態度を示している。一般の人々は、科学技術の新しい発達をもたらした生活水準の着実な向上が持続することを期待するようになっている。しかし一般の人々はまた、科学を理解していないために、科学に不信を抱いてもいる。

※全体としては(on the whole)、かなり平易な英文である。英語長文問題 高3AD 19(中央・文) の the first paragraph からの抜粋であり、そこでも解説を付けているが、下線部 expect+O+to V の O (the steady increase ...) と to V (to continue) の長短のバランスが悪く、一見すると構文が分かりにくい。目的語に関係詞節が続く場合、to V と関係詞節を入れ替えることは出来ないので O の部分が長くなるのは避け難い。これを解消するには sentence 全体を書き換える以外に方法はなく、次のように rewrite した。「読む力を書く力に活かす」参考にして欲しい。
 ※なお science and technology は複数扱いにも単数扱いにもなる。the public は(米)では単数扱いだが、(英)では複数扱いにもなる。代名詞が何を受けているかを正確に掴むことは、英文の内容を正確に読む必須の条件である。

New developments in science and technology have brought the steady increase in the standard of living, and the public has come to expect it to continue. However, it also distrusts science because it doesn't understand it.

[下線部訳] 科学技術の新しい発達が生活水準の着実な向上をもたらし、一般の人々はそうした向上が持続することを期待するようになっている。しかし一般の人々はまた、科学を理解していないために、科学に不信を抱いてもいる。

Conversation is an exchange of information and ideas; it is talk that is mutually stimulating. We enjoy pleasant conversation not only for the stimulus it provides, but also for the satisfaction we get out of knowing that our own contribution stimulates others. No wonder it is a major source of human satisfaction.

For conversation to be mutually pleasant, it must provide the participants with novelty; this means that the thinking and responses of each must have an element of unpredictability for the other. In short, conversation is mutually pleasant when the partners are well matched and do not yet know each other so intimately as to rule out all surprises.

(1) However, if novelty is significant for stimulation to be pleasant, familiarity or redundancy is no less so. The source of this is information shared by the participants. Having lived through similar experiences and witnessed the same events, their fund of memories has a large overlap; it makes their conversation effortless. They do not have to search for suitable topics of conversation because almost any random thought is suitable — that is likely to recall similar enough memories in the other person to provide the necessary degree of redundancy.

(2) The pleasantness of conversation depends on the novelty and redundancy it contains. Needless to add, the most favourable combination of novelty and redundancy, which provides the pleasantest conversation, is bound to be very different for different people. Presumably, extroverts want more novelty, introverts more redundancy, and advancing age probably shifts people's preference in favor of the latter.

※一見すると (at first sight), 読みやすい平易な英文だが, 表面的な字面を補って内容を深く正確に読み取れる人がどれだけいるだろうか。多読・速読の重要性言うまでもないが, その前提となるべき精読の力を確かめてみることも必要だろう。

(1) However, if novelty is significant for stimulation to be pleasant, familiarity or redundancy is no less so. The source of this is information shared by the participants. Having lived through similar experiences and witnessed the same events, their fund of memories has a large overlap; it makes their conversation effortless.

・ if=even if

* if と even if の中間だが, やや even if 寄りである

- ・ familiarity or redundancy is no less so (so=significant) =familiarity or redundancy is as significant (for stimulation to be pleasant as novelty is) =familiarity or redundancy is as significant (as novelty for stimulation to be pleasant)
- *no+比較級=反意語の同等比較 no less significant (than novelty) =as much significant (as novelty)
- ・ this=familiarity or redundancy is no less so
- ・ it= (Having lived through similar experiences and witnessed the same events,) their fund of memories has a large overlap

[第三段落までの訳]

会話とは情報 [知識] や考えを交換することである。つまり、会話とはお互いにとって刺激となる話し合いのことである。私たちが楽しい会話を楽しむのは、楽しい会話が与えてくれる刺激のためばかりでなく、自分自身が会話に貢献することで他人に刺激を与えていると知って得られる満足感のためでもある。当然のことながら、会話は人が満足感を得る大きな源になっている。

会話がお互いにとって楽しいものであるためには、会話は参加する人に目新しさを提供しなければならない。つまり、お互いの考えや反応に、相手が予測できない要素がなければならないということである。要するに、会話はお互いにとって楽しいものとなるのは、会話をする者同士の相性がよくて、しかもまだお互いのことを、驚きがまったくないほど詳しくは知らないときである。

しかし、(1) 刺激が楽しいものであるためには目新しさが大切であるとしても、そのためには、馴染み深いことや重複することも目新しさに劣らず大切である。馴染み深さや重複の大切さのもとになっているのは、会話に参加する人が情報や知識を共有していることである。似たような体験を乗り越えてきて、同じ出来事を目撃してきたので、彼らの記憶の蓄えは重複する部分が多い。そのために会話は楽なものになる。彼らは適切な話題を探す必要がないのだ。というのは、適当に思いついたことがほとんどどれも適切だからである。つまり、おそらく相手の心に似たような記憶を呼び起こして、必要な程度の重複を提供してくれるからだ。

(2) The pleasantness of conversation depends on the novelty and redundancy it contains. Needless to add, the most favourable combination of novelty and redundancy, which provides the pleasantest conversation, is bound to be very different for different people. Presumably, extroverts want more novelty, introverts more redundancy, and advancing age probably shifts people's preference in favor of the latter.

- ・ The pleasantness of conversation depends on the novelty and redundancy it contains. =The degree to which conversation is pleasant depends on the

novelty and redundancy it contains. =It depends on the novelty and redundancy conversation contains how pleasant it (=conversation) is.

- advancing age probably shifts people's preference in favor of the latter = as age advances, people's preference probably shifts in favor of the latter

こういう文法用語自体はあまり使いたくないが、いわゆる名詞構文、無生物主語構文の理解と処理の仕方である。

(2) 会話がどのくらい楽しいものになるかは、会話に含まれる目新しさと重複によって決まる。つけ加えるまでもなく、最も楽しい会話を提供してくれる、目新しさと重複の最も好ましい組み合わせは、必ず人によって著しく異なる。おそらく、外向的な人は目新しさをより多く好み、内向的な人は重複をより多く好むだろう。そして歳をとるにつれて、たぶん人々の好みは後者に移っていくだろう。

Even genuine memories can be unreliable; no good court of law accepts the uncorroborated recollections of a witness as conclusive. Support from the memory of someone else might help, but only to a limited degree, for memory is subjective. As the police know to their frustration, two witnesses to the same event can give very different accounts of it. Memories can change, adding and losing details, distorting out of shape under the pressure of time.

[全訳] 本当の記憶ですら信頼できないことがあり得る。まともな裁判所は、裏づけない、証人の記憶を決定的な証拠として認めることはない。他の誰かの記憶による裏づけが役立つこともあるかもしれないが、ある限度までである。なぜなら、記憶は主観的なものだからである。警察は分かっているが [ように]、同じ出来事の二人の証人が著しく異なる証言をすることもありうる。記憶は、時間という圧力を受けて形が崩れ、細部を追加したり失ったりして、変化しかねないのだ。

※英語長文問題 高3 SA42(千葉大・前期) の the third paragraph の抜粋である。Memories can change, adding and losing details, distorting out of shape under the pressure of time. を正確に理解するには相当な精読力が必要である。

adding and losing details と distorting out of shape under the pressure of time が分詞構文であることは容易に分かるが、主節の Memories can change との関係はどう捉えるかである。通常、文の後半に位置する分詞構文が兼ねる接続詞は and か as (...しながら) である。一つ目の adding and losing details を見る限りでは、and と考えてもそれほど違和感はないが、二つ目の distorting 以下も同様に and に当たると考える人は母国語の力、つまり言語能力そのものが十分に発達していない。「記憶は変化し、そして時間の圧力を受けて形が崩れる」という日本語に違和感を覚えない人を納得させるのは容易ではない。

視点を変えて文構造を考えてみよう。分詞構文といえども、二つ並列されれば接続詞が必要だが、二つの分詞構文は and や or で繋がれていず、カンマで区切られているだけである。これを言い換え・同格と考えれば構文的には説明がつく。意味的にも distorting out of shape under the pressure of time を adding and losing details の言い換えと捉えることは可能である。ところが一つ目の分詞構文を省いて Memories can change, distorting out of shape under the pressure of time. =Memories can change, and (they can) distort out of shape under the pressure of time. と考えると、意味的に成り立たないことは前述の通りである。

ここでもう一度、分詞構文の働きを考えてみよう。

分詞構文というのは、主節(主文)の述語動詞を修飾すると考えている人が少なくないが、述語動詞に限らず、準動詞つまり、不定詞・動名詞・分詞をも修飾する。ということは、分詞構文が分詞構文を修飾するということもある。今回はそのケースである。distorting out of shape under the pressure of time が adding and losing details を修飾し、その distorting out of shape under the pressure of time で修飾された adding and losing details が Memories can change を修飾していることになる。そしてふたつの分詞構文がその働きを兼ねている接続詞は and ではなく「as」である。Memories can change, as they add and lose details(,) as they distort out of shape under the pressure of time. ということになる。

では、この一文を意味内容を大きく変えずに、分詞構文や接続詞を用いないで書き換えたらどうなるだろうか。一例を提示する。

Memories can change, through (the process of) adding and losing details(,) by distorting out of shape under the pressure of time.

※文法軽視・文法無視の英語教育で、こうした正確な英語の読み書きの力を養うことは「絶対に」不可能である。

Instead, he votes for the man who fits his standardized picture of what a candidate "should" look like or sound like, buys the goods that someone in his "situation" in life "should" own, lives the life that others define for him. The mark of the stereotype-person is that he never surprises us, that we do indeed have him "typed." No one fits this straitjacket* so perfectly as someone whose opinions about others are fixed and inflexible.

その代わりに、そういう人間は、候補者はどのように見え、どのように話す「べき」かという自分の画一的なイメージに合う人物に投票し、自分のような「立場」にある人間が持つ「べき」品物を買ひ、他人が決めてくれる人生を送る。ステレオタイプな人間の特徴は、彼らはけっして私たちが驚かせないこと、私たちが彼らを実際に「型」に当てはめてしまうことである。そして、他人に対する考えが固定的で柔軟性に欠ける人間ほどこの「型」という拘束服がぴったり合う人間はいない。

※**英語長文問題 高3 S A 23(名古屋大・前期)**の最後の段落である。元の出題ではこの部分は設問にはなっていなかったが、阿佐谷英語塾の高3 S A αクラスの夏期授業用テキスト・サンプルに取り上げた際に下線部和訳問題として追加した。このパッセージは、前半の内容と後半の内容では読みやすさ(難易度)の点で大きな差がある。これほど差がある文章も珍しいと言ってよい。通常は上記の日本語訳程度で十分であるが、前回および前々回に続いて、英文英訳を試みた上で、別の日本語訳を提示してみたい。

- ・ he votes for the man who fits his standardized picture of what a candidate "should" look like or sound like,
=he votes for the man whose appearance or way of speaking he assumes to be suitable for a candidate,
- ・ buys the goods that someone in his "situation" in life "should" own,
=buys the goods someone in the similar position to his in life normally owns,
- ・ lives the life that others define for him.
=does not live the life of his choice but of others' choice.

その代わりに、そういう人間は、外見や話し方が候補者に相応しいと自分が思い込んでいる人物に票を投じ、自分と同じような立場の人間であればたいてい持っている品物を買ひ、自分が選んだのではなく他人が選んだ人生を送る。

"I believe that the very purpose of our life is to seek happiness. That is clear. Whether one believes in religion or not, whether one believes in this religion or that religion, we all are seeking something better in life. So, I think, the very motion of our life is towards happiness ..."

With these words, spoken before a large audience in Arizona, the Dalai Lama got to the core of his message. But his claim that the purpose of life was happiness raised a question in my mind. Later, when we were alone, I asked, "Are you happy?"

[全訳]「私たちの人生の真の目的は幸せを追求することだと私は信じています。それは明らかかなことです。宗教を信じていようといなかろうと、この宗教を信じていようとあの宗教を信じていようと、私たちは誰もみな人生により良いものを求めているのです。だから、私が思うに、私たちの人生はまさに幸せに向かって進んでいるのです...」

アリゾナの大勢の聴衆の前で語ったこうした言葉で、ダライ・ラマは彼のメッセージの核心に触れた。しかし、人生の目的は幸せだという彼の主張は私の心に疑問を生じさせた。そのあと、私たち二人だけになったとき、私は彼に尋ねた。「あなたは幸せですか」

※高3 S A27 2001年(早稲田・一文)の第一・第二段落の全訳である。以下のように adapt したが、これはむしろ早稲田・文/文化構想用の英語による言い換えの対策とを考えてもらいたい。ただし英文和訳や和文英訳のための語彙や構文の補強としても役立つことに変わりはないはずである。

※これまで最もレベルが高かった、文と文化構想の英文要約の出題傾向が1917年に変化した。それでも受験生にとっては荷が重いことに変わりはない。同時に2017年から、英語民間試験で一定の基準を満たせば、英語の一般試験の受験は不要になった。英検二級は、採点基準からしていかにも甘い。国内の民間試験はみな同様である。両学部を意識した書き換えは不要になったので、提示する英文を大幅に書き換えた。(この項補足)

"I believe that to pursue happiness is the true goal of our life. That is obvious. Religious or unreligious, faithful to any religion, we are all seeking for a better thing through life. Therefore, in my opinion, our life is exactly moving towards happiness ..."

By these words, which he spoke before a large crowd in Arizona, the Dalai Lama went to the heart of his theme. However, his argument that our lives aimed to be happy posed a question to me. Then, when there was no one else around us, I asked, "Are you happy?"